す]。成服（喪服をつけること）の日になって、はじめて主人と兄弟は粥を食べます。[諸子（多くの子）は、粥を食べます。妻と側室は服喪の期間が9か月なら、粗末な料理を食べ、水を飲みますが、おかずや果物を食べません。5か月や3か月の人は、酒を飲み、肉を食べますが、宴会を一緒に楽しみません。これ以降は、理由がなければ、外に出ません。もし葬式に関する用事があって、やむをえず出入りするときには、（男性は）布の鞍をつけた飾り気のない馬に乗り、（女性は）布の簾をかけた白木の馬車に乗ります]。およそ重喪（期間の長い服喪）が終わらないうちに軽喪（期間の短い服喪）をする必要が出たときには、その服喪を制して大声をあげて泣きます。月の最初には位置を用意し、その服喪に服して大声をあげて泣きます。終わったら、重喪用の喪服に戻ります。その服喪が終わったら、軽喪用の喪服を着ます。もし重喪を終えても、軽喪が終わっていないときには、軽喪用の喪服を着て、そうして服喪の残りの日数を終わらせます。

第7章　朝夕の哭奠、上食

朝奠（朝のお供え）。[毎日、早朝に起き、主人以下全員は、その喪服を着て入り、位置につきます。尊長（目上の人）は、座って大声をあげて泣きます。卑者（目下の人）は、立って大声をあげて泣きます。従者は、盥（たらい）と櫛といった道具を霊牀のそばに用意し、魂帛（白い絹でつくられた形代で、生まれた年月日と死んだ年月日を記したもの）をささげ持って出て霊座につけ、それから朝奠（朝のお供え）をします。執事は野菜、果物、脯（干し肉）、醢（肉の塩から）を用意します。祝（祝詞をあげる人）は、盥（たらい）で手を洗い、香を焚き、酒をつぎます。主人以下は、二度おじぎし、大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします]。食事のときは、上食（食事をお供えすること）をします。[朝奠（朝のお供え）の作法のようにします]。夕奠（夕方のお供え）。[朝奠（朝のお供え）の作法のようにします。終わったら、主人以下は魂帛（白い絹でつくられた形代で、生まれた年月日と死んだ年月日を記したもの）をささげ持って入り霊牀につけ、大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします]。大声をあげて泣くのに、決められたときはありません。[朝から夕方までの間、悲しみがこみあげてきたときには、喪に服する部屋で大声をあげて泣きます]。朔日（毎月の初日）のときには、朝奠（朝のお供え）において饌（お供え物）を用意します。[饌は、肉、魚、鬍、米を使い、羹（スープ）と飯（らいす）をそれぞれ一つずつ食べさせます。礼は朝奠（朝のお供え）の作法のようにします]。新物（旬のもの）があったときには、それを丁寧にお供えします。[上食（食事をお供えすること）の作法のようにします]。

第８章　弔（弔問）、奠（お供え）、賻（香典）

およそ弔は、すべて素服（染めていない服）です。［幘頭（頭巾）、衫（着物）、帯は、すべて白生絹を使ってつくります］。奠は、香、茶、燭（灯火）、酒、果物を使います。［形式があり、場合によって食物を使い、そのときには別に手紙をつくります］。賻は、銭帛を使います。［形式があり、とても親しい友人だけが必要となります］。名刺を使って名乗り、相手の都合を尋ねます。［客人と主人がすべて官職についているときには、門状を準備します。そうでないときには名紙を用意します。その裏面に弔問したい旨を書きつけます。まず人に持って行かせます。それから礼物と一緒に入ります］。入り、大声をあげて泣き、奠（お供え）をし、終わったら、弔って退きます。［名乗り終わったら、喪主の家では火をつけて蝋燭を点灯し、席をしいて全員が大声をあげて泣いて待ちます。護喪は、客人を出迎えます。客人は、入って庭先まで行き、進み出て丁寧に手を組み合わせて挨拶して、「竊聞く某人傾背、不勝悼恨、敢請入酹、并伸慰意」と言います。護喪（喪主を手伝う人）は、客人を引き入れます。霊座の前まで行って大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします。二度おじぎし、お香を焚き、ひざまずいて茶、酒をつぎ、うつむいて伏し、立ち上がります。護喪（喪主を手伝う人）は、大声をあげて泣いている人を止めます。祝（祝詞をあげる人）は、客人の右において、祭文、奠賻状を読みます。終わったら、立ち上がります。客人と主人は、全員が大声をあげて泣き、悲しみの限りを尽くします。客人は、二度おじぎします。主人は大声で泣きながら出て、西に向き、額を地につけて挨拶し、二度おじぎします。客人もまた大声をあげて泣き、東に向き、主人のおじぎに応えておじぎし、進み出て「不意凶変、某親某官、奄忽傾背、伏惟哀慕、何以堪處」と言います。主人は答えて「某罪逆深重、禍延某親、伏蒙奠酹、并賜臨慰、不勝哀感」と言います。さらに二度おじぎし、客人はそれに応えておじぎします。さらに互いに向き合い、大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします。客人が先に止め、主人をなぐさめて「修短有数、痛毒奈何、願抑孝思、俯従礼制」と言います。そこで丁寧に手を組み合わせて挨拶して、出ます。主人は大声をあげて泣いて、入ります。護喪（喪主を手伝う人）は、送って庭先まで行き、たてた茶を出して退きます。主人以下は、大声をあげて泣くのを止めます。もし死者が高官なら、「薨逝」と言います。やや高官なら、「捐館」と言います。遺族が高官のときには、「奄棄榮養」と言います。死者と遺族がともに官位をもっていないなら、「色養」と言います。もし尊長（目上の人）が客人におじぎするなら、礼もまた以上と同じになります。ただその言葉は、それぞれ啓状（手紙のやりとり）の方式のようにします。それは巻末に見られます］。

第９章　聞喪（訃報を聞くこと）、奔喪（服喪にかけつけること）

親が亡くなったことを始めて聞いたら、大声をあげて泣きます。［親とは、父母のことです。大声をあげて泣くことによって使者に答え、さらに大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくし、事情を尋ねます］。服を着替えます。［布を裂いて、四脚白布衫、縄帯、麻履をつくります］。完了したら、行きます。［一日に百里を行きますが、夜に行くことはしません。死を悲しみ悼んでいるとはいえ、それでもまだ害を避けるためです］。道中、悲しみがきたときには、大声をあげて泣きます。［大声をあげて泣くのは、市場や街中などの騒がしいところを避けます。司馬公は「最近の奔喪の人と柩に随行する人は、市街に入ったときには大声をあげて泣き、市街を過ぎたときには止めています。これは、見せかけだけの人をあざむくやり方です」と言っています］。その州境（実家のある州の境界）、その県境（実家のある県の境界）、その城（都市）、その家（実家）が見えたら、そのつど大声をあげて泣きます。［その家が城（都市）にないときには、その郷（実家のある村里）が見えたら大声をあげて泣きます］。門に入り、柩の前まで行き、二度おじぎし、再び服を着替え、位置について大声をあげて泣きます。［最初に服を着替えるのは、最初の服喪のようにします。柩の東西の面に座り、大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします。さらに服を着替えるのは、小斂や大斂のようにし、これまた同じようにします］。その後、四日目は、成服（喪服をつけること）をします。［家族と互いに弔い、客人がやってきたときには、最初であるかのようにおじぎします］。もしまだ行えないときには、位置をつくって、奠（お供え）をしません。［椅子１つを用意し、そうして尸（遺体）と柩の代わりとします。左右前後に位置を用意して大声をあげて泣きます。作法のようにします。ただし奠（お供え）を用意しません。もし亡くなったほうに子孫がいないときには、このとき一緒に奠（お供え）を用意します。作法のようにします］。服を着替えます。［これもまた訃報を聞いてから四日目にします］。道中であるときも、家に着いたときも、すべて以上の作法のようにします。［もし亡くしたほうに子孫がいないときには、道中において朝と夕方に位置をつくり、奠（お供え）を用意します。家についたときは、ただ服を着替えないだけで、お互いに弔うとき、客人におじぎするときは、作法のようにします］。もし葬り終わっていたときには、先ず墓に行って大声をあげて泣き、おじぎします。［墓に行く人は、墓が見えたら大声をあげて泣き、墓に着いたら大声をあげて泣きます。これは家にいるときの作法のようにします。まだ成服（喪服をつけること）をしていない人は、墓において服を着替え、家に帰り、霊座の前まで行き、大声をあげて泣き、おじぎし、四日目に作法のようにして成服（喪服をつけること）をします。すでに成服（喪服をつけること）をしている人も、同様ですが、ただし服を着替えません］。斉衰より下の服喪の必要がある人は、

訃報を聞いたら、位置をつくって大声をあげて泣きます。[尊長（目上の人）は、正堂において行います。卑幼（目下の人）は、別室において行います。司馬公は、こう言っています。「今の人は、全員が日を選んで挙哀（葬式や納棺後に大声をあげて泣く礼法）をします。およそ悲哀の至りは、初めて訃報を聞いたときにあり、そのときにはすぐさま大声をあげて泣くのが当然です。どうして日を選ぶ余裕があるでしょうか。ただし法令に州や県の役所において挙哀をしてはいけないという文言があるときには、官職についている人は、僧舎において大声をあげて泣くべきです。その他は、全員が本家において大声をあげて泣いてもさしつかえありません」]。もし服喪にかけつけるときには、家に着いてから成服（喪服をつけること）をします。[服喪にかけつける人は、きらびやかな服を脱ぎ捨て、冠をつけてすぐ行きます。道中にあって、斉衰の人は、郷里が見えたら大声をあげて泣きます。大功の人は、門が見えたら大声をあげて泣きます。小功より下の喪に服する人は、門に着いたら大声をあげて泣きます。門を入り、柩の前まで行き、大声をあげて泣き、二度おじぎし、成服（喪服をつけること）をし、位置について大声をあげて泣きます。弔いは、作法のようにします]。もし服喪にかけつけないときには、四日目に成服（喪服をつけること）をします。[服喪にかけつけない人は、斉衰のときは三日間ずっと朝と夕方に位置をつくり、集まって大声をあげて泣きます。四日目の朝に成服（喪服をつけること）をするわけですが、これもまた同じようにします。大功より下の喪に服する人は、始めに訃報を聞いたときに位置をつくり、集まって大声をあげて泣きます。四日目に成服（喪服をつけること）をするわけですが、これもまた同じようにします。全員が毎月の初日に位置をつくり、集まって大声をあげて泣きます。服喪の期間が満了したときには、その翌月の初日になったところで位置をつくり、集まって大声をあげて泣き、かくして服喪を終わります。その間に悲しみがきたときには、大声をあげて泣いてもさしつかえありません]。

第１０章　治葬

三カ月して葬りますが、期日に先立って葬るべき土地を選びます。[司馬公は、こう言っています。「昔は、天子は七カ月、諸侯は五カ月、大夫は三カ月、士は一カ月を過ぎて、葬りました。今は、五服（五種類の服喪）の年月として、王公以下だれもが三カ月して葬るように成めています。しかしながら、世俗は、葬師（埋葬の先生）の説を信じ、年月日時を選んでから、さらに山水形勢を選び、そうして子孫の貧富、貴賤、賢愚、寿夭はすべてここにかかっているとします。しかしながら、その術というものは、さらに多くが同じでなく、言い争いが次から次に起こり、いつまでたっても決まらず、一生ずっと葬らないままになっています。場合によっては、何世代にもわたって葬らないままになって

います。場合によっては、子孫が衰退し、起き場所を忘れてしまい、とうとう放棄して葬らないで終わっています。そういった人は、まさに殯葬（遺体の安置と埋葬）が確実に人の禍福を左右するとさせているわけですが、子孫たる者は、どうしてその親の遺体が腐敗して悪臭を出し、そのまま野ざらしにされているのを我慢して、子孫の利益をみずから求められるでしょうか。これ以上に礼に反し、義を破るものはありません。しかし、親孝行な子の心としては、心配されることについて遠い先まで深く考えます。土の掘り方が浅ければ人からあばかれるという恐れがあり、深ければジメジメしていてすぐに朽ちてしまうという恐れがあるので、必ず土が厚くて水が深いところにある土地を求めてから、遺体を葬ります。そういうわけで遅ばないわけにはいきません」。ある人が「家が貧しく、郷里が遠く、帰って葬ることができないときには、どうすればよいのでしょうか」と言うと、公は「子游が喪礼の道具を質問すると、孔子は「家の財産の有無にかなったものにしなさい」と言いました。子游が「家の財産の有無に応じて、どのように整えたらよいのでしょうか」と言うと、孔子は「豊かでも、礼の決まり以上にしてはいけません。もし貧しいなら、遺体をまるごと納棺し、そこで葬ります。葬るときには、遺体を納めた棺をつりさげて墓穴におろし、埋葬します。これを非難したりする人がいるでしょうか」と言いました。昔、廉范は、（みずから遺体を運んで）千里もの距離を移動して葬りました。郭原平は、（貧乏でしたが）みずから土地を買って墓を営んでいます。どうして豊かになるのを待ってから、その親を葬ったりできるでしょうか。礼にあっては、まだ葬っていないなら服を着替えず、粥を食べ、粗末な小さな家に住み、苫（むしろ）に寝て、土の塊を枕にします。思うに親の遺体を葬る場所が決まっていないことを悩んでいるので、寝るのも、食べるのも落ち着きません。どうして埋葬を放置したままで遊びに出て、普通に炊いた米を食べ、きれいな服を身につけることができるでしょうか。そのようなことをする人はどういう心づもりであるのか分かりません。世の人びとのなかには、よそで役人となって遠方で死んだ人について、その子孫が死者を火葬し、その灰を持ち帰って葬るという人もいます。そもそも親孝行な子は、親の全身を愛します。ですから、親の遺体を納棺して収蔵します。他人の遺体を傷つけ破損するのは、法律においても厳しく罰せられます。ましてや子孫なら、それがまあこのように道理に反した行いであるのは言うまでもありません。その始まりはと言うと、思うに羌族や胡族の習俗が起源で、それがだんだんと中国に浸透してきて、これを長いこと行っているうちに、習慣化して常識となったのでしょう。見る人は、のんびりとしていて、怪しんだことがありません。どうして悲しまないでいられるでしょうか。延陵の季子は、斉に行き、その子が死んで、嬴と博の間に葬りました。孔子は、これを礼に合っているとしました。まちがいなく、帰

って葬ることができないなら、その地に葬ってもさしつかえないのです。どうしてそれでもやはり火葬よりもよくないとできるでしょうか。相の音は骨です。悪の音は烏です。斉は、子の声母（はじめの子音）と細の韻母（字音から声母を除いた部分）を組み合わせた音になります。窓は、彼の声母（はじめの子音）と歛の韻母（字音から声母を除いた部分）を組み合わせた音になります。程子は、こう言っています。『孝経』に言う「その宅兆を卜する」とは、墓地の善し悪しを選定することです。陰陽家が言っているところの禍福（その土地が不運をもたらすか、幸運をもたらすかを占うこと）ではありません。土地がよいときには、祖先の霊は安らかになり、その子孫は繁栄します。たとえば植物の根に土をもって根をしっかりさせると、枝や葉が茂るものです。道理として、もともとそのようになっています。土地が悪いときには、これとは反対になります。そのようであれば、どんな土地がよい土地なのでしょうか。土の色につやとうるおいがあり、草木が元気よく育っているのが、よい土地である証拠です。子孫と父祖（父親や祖先）は互いに同質の気（材料）でつくられていて、あちらが安らかであるとにはこちらも安らかとなり、あちらが危ういときにはこちらもあやうくなります。これもまた道理としてそのようになっています。しかし、迷信に拘泥している人は、遂って、土地の方位を選んだり、日の吉凶を決したりします。なんと拘泥していることでしょうか。はなはだしい人は、死んだ人のための墓地であるということを忘れ、どのようにして墓地を選定すれば子孫の利益となるかを考えます。これは親孝行な子が親の柩を安置するときに注意すべきことではありません。ただ次の五つのわざわいに関しては、注意することが必要です。すなわち、他日、その土地が、①道路にされること、②城壁にされること、③廟にされること、④有力者に奪われること、⑤田畑にされること、以上の五つです」。別の文献によりますと、「五つのわざわいは、①城壁にされること、②みぞにされること、③道路にされること、④村落にされること、⑤井戸や陶器を焼くかまどにされること」となっています。私が考えますに、昔は葬る土地、葬る日取りは、すべて占いで決めていました。今の人は、占いの仕方を理解していません。しばらくは世俗に従い、土地や日取りを選んでもさしつかえありません]。

日を選び、塋域（墓地）を開き、后土（大地の神）を祭ります。[主人は、朝に大声をあげて泣き終わったら、執事たちをひきつれ、獲得した土地において墓を掘ります。四隅はその土を外に盛り、掘るところはその土を南に盛り、それぞれ一つの目印を立てます。南門にあたるところには二つの目印を立て、遠い親戚もしくは客人の中から一人を選び、后土氏（大地の神様）に告げます。祝（祝詞をあげる人）は、執事たちをひきつれ、掘るところの目印の左に位置を用意し、南に向き、盞注（杯と水さし）、酒果（酒と果物）、脯醢（干し肉と

塩から）をその前に用意し、さらに盥盆（桶や皿）、幄巾（手ぬぐいやフキン）2つをその東南に用意します。その東には台（物を載せる台）と架（物を架ける道具）があり、告げる人が手を洗うところになります。その西にはなにもなく、そこは執事が手を洗うところになります。告げる人は、吉服（吉事に着る礼服）で、神位（神様に位置）の前に立ち、北に向きます。執事は、その後ろにあり、東を上とし、全員が二度おじぎします。告げる人と執事は、全員が手を洗い、手をふきます。執事は、一人が酒注（酒をつぐための水さし）を取り、西に向いてひざまずきます。一人が盞（杯）を取り、東に向いてひざまずきます。告げる人は、酒をくみ、注（水さし）をかえし、盞（杯）を取り、神位（神様の位置）の前においてそそぎ、ひれ伏して立ち上がり、やや退いて立ちます。祝（祝詞をあげる人）は、版（神を祭るときに祝詞を書くもの）を手に持って告げる人の左に立ち、東に向いてひざまずき、これを読んで「維某年歳月朔日、子某官姓名、敢告於后土氏之神、今為某官姓名、営建宅兆、神其保佑、俾無後艱、謹以清酌庶羞、祗薦於神、尚饗」と言います。終われば、位置に戻ります。告げる人は、二度おじぎします。祝と執事は、全員が二度おじぎします。片づけて出ます。主人は、もし帰ったときには、霊座の前において大声をあげて泣き、二度おじぎします。あとは、以上を手本とします]。

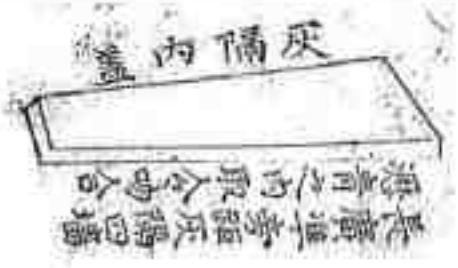
后土氏に祈る図

終わったら、穴を掘ります。[司馬公は、こう言っています。「今の人の葬り方には2つあります。土地の真下を掘って穴をつくり、そして棺を吊り下げ、そうして埋葬するものがあります。トンネルを横にうがち、土の部屋を掘ってその中に柩を差し入れるものがあります。調べてみますに、昔は、ただ天子だけがトンネルをつくることができ、その他は全員が真下に穴をつくり、そして棺を吊り下げ、そうして埋葬していました。今は、以上を原則とすべきです。土地を掘るにあたっては、狭くして深くするようにします。狭いときには、崩

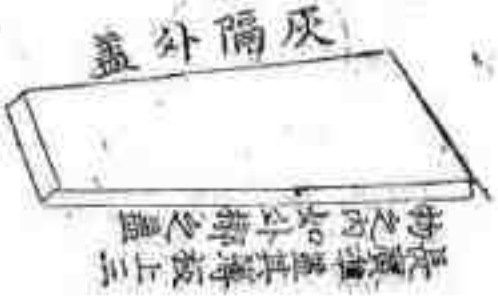
壊し損壊することがないですし、湿いときには、盗賊が近づきにくくなります]。

灰隔をつくります。[穴を掘るのが終わったら、先ず炭の粉末を穴の底にしき、突き固め、すきまなく固まらせ、厚さを2から3寸までにします。そのあとで石灰、細かい砂、黄土を均等にかきまぜたものをその上にしきます。灰は3分で、二つはそれぞれ1でもさしつかえありません。突き固め、すきまなく固まらせ、厚さを2から3尺にします。別に薄い板を使って灰隔をつくります。椁（棺を入れる外箱）の形状のようにします。内部は漆清（松やにと油を混ぜた塗料）を用いて塗ります。厚さは3寸ばかりとします。中は棺を入れられる大きさを取ります。墻（壁）は、棺よりも4寸ばかり高くし、灰の上に置きます。そこで四方から四物（炭の粉末、石灰、細かい砂、黄土）を枠のようにして下ろしますが、これも薄い板を用いて隔て、炭の粉末は外に入れこみ、三物（石灰、細かい砂、黄土）は内に入れこみます。底の厚さのようにします。これを突き固め、すきまなく固まらせ終わったときには、その板を枠のようにしたまま抜き上げ、上近くに再び炭や灰などを下ろして突き固めます。墻（壁）の高さと水平になってから止めます。思うに椁（棺を入れる外箱）を使わなかったときには、漆清（松やにと油を混ぜた塗料）を入れようがないので、以上の制式をつくったのです。さらに炭は木の根を防ぎ、水や蟻を避けます。石灰は砂を得たときにはすきまなく固まり、土を得たときにはぴったりくっつきます。長年を経過して完全な石のようになり、螻（けら）、蟻（あり）、盜（泥棒）、賊（強盗）は、全員が掘って進めなくなります。程子は、こう言っています。「古人の埋葬は、親の遺体が滅び去るまで土を親の肌に触れないようにさせました。

灰隔の構造



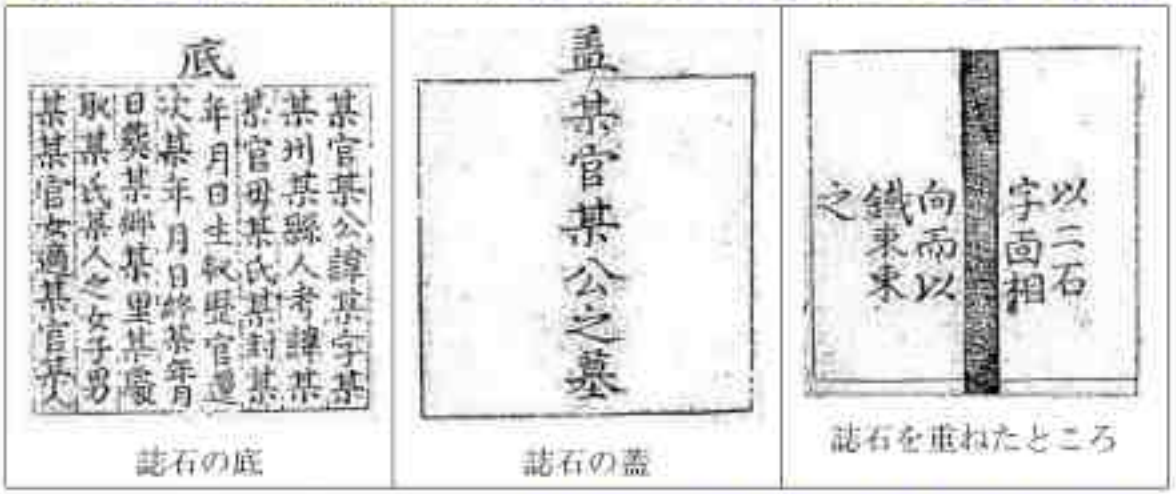
内蓋



外蓋

今、珍奇な道楽品ですら、念入りに保管し、そうして破損や汚れを防いでいます。ましてや親の遺骨については、どのようにすべきでしょうか。世俗の浅はかな知識では、ただ遺体を見えなくしようとするだけです。さらに遺体がすみやかに滅び去るのを求める説もあります。これはどうして「必ず誠意をつくし、必ず信義をつくす」という意味を知っていると言えるでしょうか。とりあえず遺体が滅び去らないようにしようとしているわけではない以上、遺体がまだ滅び去っていないときには、保管はこのようにするしかありません」]。

誌石（墓誌銘を記した石）を刻みます。[石を２つ使用します。その一つは蓋とし、「有宋某官某公之墓」と刻みます。仕官していないときにはその字（呼び名）を書いて「某君某甫」とします。もう一つは底とし、「有宋某官某公諱某字某、某州某県人。考諱某某官，母氏某封某、某年月日生、叙歴官遷次、某年月日終、某年月日葬於某郷某里某處、娶某氏某人之女、子男某某官、女適某官某人」と刻みます。婦人は、夫がいるときには蓋に「有宋某官姓名某封某氏之墓」とします。封（領地）がないときには、「妻」とします。夫が仕官していないときには、夫の姓名を書きます。夫がいないときには、「某官某公某封某氏」とします。夫が仕官していなかったときには、「某君某甫妻某氏」とします。その始まりの文章は「年齢がいくつかの時に某氏〔某家〕の嫁ぎ～」とし、夫にちなんで封号（称号）をつけますが、ないときには、そうしません。葬る日には、２つの石の字の書いてあるほうを互いに向かい合わせて、鉄束で束ね、これを墓穴の前、地面に近い３～４尺の間に埋めます。思うに、地形が変化したり、まちがって人に動かされたりしても、この石が先に見えたときには、その姓名を知っている人がいれば、埋め戻してくれるだろうと考えてのことでしょう]。



誌石の底　　誌石の蓋　　誌石を重ねたところ

明器（副葬品）を製造します。[木を刻んで、車、馬、下男、下女をつくり、それぞれ親を養うための道具を手に持たせ、ふだんの形をかたどって、それを縮小したものにします。法令に照らし合わせ、官位の等級が五品、六品である場合は人形の数が３０種類、七品、八品である場合は２０種類、陞朝官（昇殿

を許された官位）でない場合は１５種類です]。

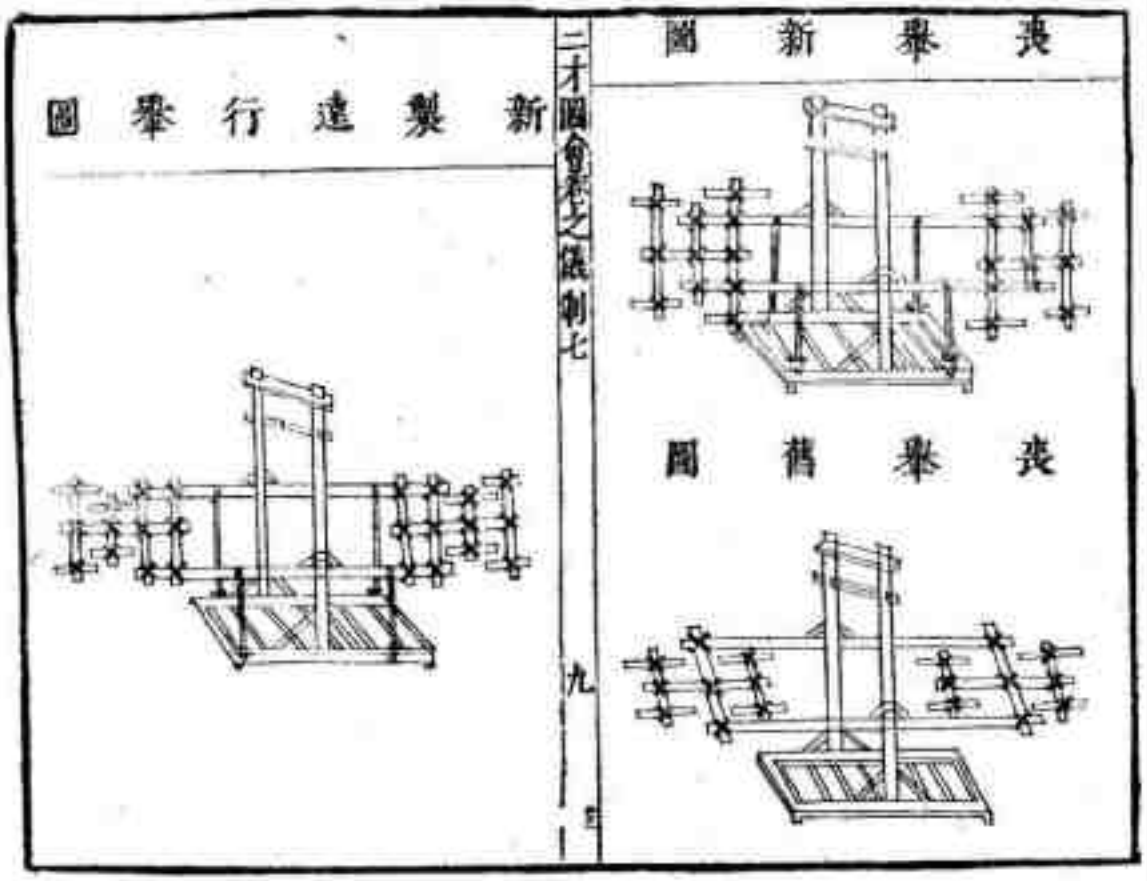
下帳を製造します。[下帳とは、牀張（ベッドのカーテン）、茵席（しとねとむしろ）、倚卓（イスとテーブル）の類のことです。これもふだんの形をかたどって、それを縮小したものにします]。

苞（竹のざる）を製造します。[竹のざるは一つで、遣奠（出棺時に備えること）のときに余った脯（干し肉）を盛るのに使います]。

筲（竹の器）を製造します。[竹の器は５つで、五穀を盛るのに使います]。

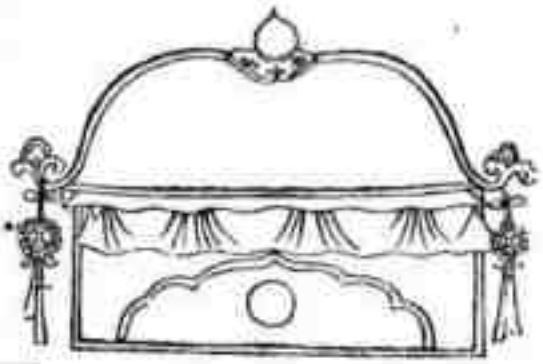
甓（陶磁器）を製造します。[陶磁器は３つで、酒、脯（干し肉）、醢（塩から）を盛るのに使います。司馬公は、こう言っています。「明器から甓までは、土を入れて墓穴を半分まで埋めたところで、横穴を掘って便房（付属の部屋）とし、そこに納めます」。私が調べますに、以上は古人がその親の死に耐えられないという意思を示したものであるとはいえ、しかしながらまったく有用のものではありません。とりわけ脯肉（干物にした肉）は腐敗し、虫を発生させ、蟻を集め、とりわけ不都合なものとなります。これは使用しなくても、さしつかえありません]。

大輦（柩を運搬するための道具）を製造します。[昔は、柳車（霊柩車）の制度がとても詳細でした。今はそのようにできませんが、ただし世俗に従ってこれをつくり、こわれにくく、柩を載せたり降ろしたりしやすい仕組みを採用するだけです。その構造はと言うと、２つの長杠（長い柄）を使用し、柄の上に伏兔（縦棒を長い柄に固定するためのもの）を加えます。柄のところに付け、丸い穴をつくります。別に小方牀（木のわく）をつくり、柩を載せるのに用います。足は高さ２寸です。横に２つの柱（小方牀の上に立て、長い柄と接続するための柱）を立て、柱の外に圓枘（柱を長い柄に固定するための棒）を施し、伏兔の穴の中に入れます。長さは穴の外に出るほどにします。圓枘と穴の間は、さしこみが極めて円滑になるようにすべきで、そのために油を塗り、大輦を持ち上げたり、降ろしたりする際に柩が常に地面に平行になるようにさせます。２本の柱の上近くには、さらに四角い穴をつくり、横局（横棒）をさしこみます。横棒の両端の柱より外に出ているところには、さらに小局（横棒が柱の穴から抜けないようにするためのクイ）を加えます。長い柄の両端には横江（横棒）を施し、横江の上には短杠（短い柄）を施し、短杠の上には場合によって



大轝

竹格（旧式）

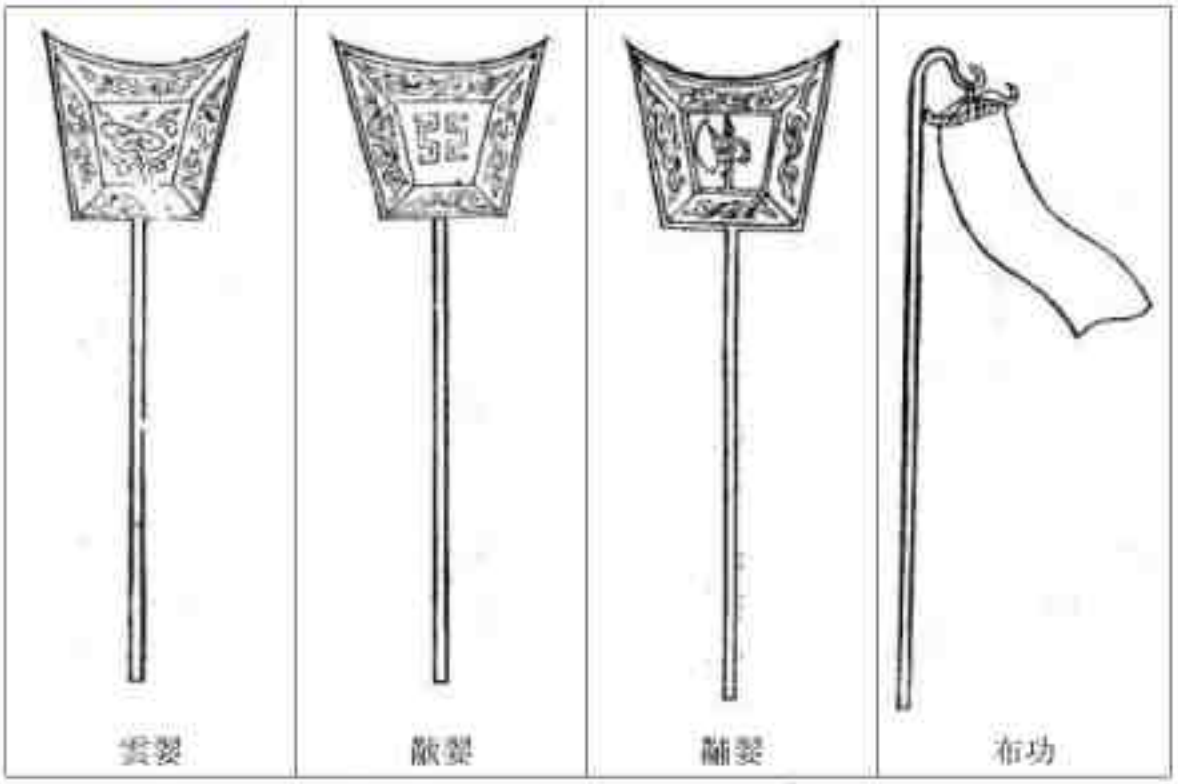


竹格（新式）

はさらに小杠（小さい柄）を加えます。かさねて新しい麻の大縄をつくり、それを柄に付けて肩ひものようにして使うために用意します。以上はすべて実際に使用するために非常に必要で、不可欠なものです。ただし以上の制式のようにして、衣を用いて棺を覆うようにするのも、道を行くときに見苦しくなくするのに役立ちます。場合によって、さらに飾りを加えたいときには、竹を用いて格子をつくり、色絹を用いて結び、上は撥蕉亭（蓮華をうつむけた形状）のようにし、それを中心にして竹の格子に帷幔（カーテンのようなもの）をまき

つけ、四隅に流蘇（五色の組み紐）を垂れ下げるだけです。しかしながら、これまたとても高くしてはいけません。ひっかかって支障の出ることが多くなる恐れがあります。とても華美にすべきではありません。むだに見た目をきれいにすることになります。もし運搬する道のりが遠いなら、以上のような虚飾をしてはいけません。ただし油単（一重の油紙）を多く使用して柩をつつみ、そうして雨水を防ぐようにするだけです]。

翣（棺を装飾するもの）を製造します。[木を用いて、枠をつくります。それは、扇のような形にして方形にし、両方の角を高くし、広さは2尺、高さは2尺4寸です。白い布をはります。柄の長さは、5尺です。黼翣は、黼（斧の絵）を描きます。黻翣は、黻（弓の字形を模様にしたもの）を描きます。翣に共通して描くのは、雲気です。その縁はすべて雲気とします。すべて紫で描くのを標準とします]。



位牌を製作します。[程子は、こう言っています。「位牌をつくるには、栗を使用します。趺（土台の部分）は4寸四方で、厚さは1寸2分です。これを揃って底まで穴をあけ、そうして位牌の本体を受けます。本体は、高さが1尺2寸で、広さが3寸で、厚さが1寸2分です。上の5分を削って頭部を丸くし、上から1寸のところで前に切りこみを入れて、あごをつくり、そのまま下まで削って分かちます。4分が前（箱の蓋にあたる部分）になり、8分が後（箱の本体にあたる部分）になります。あごの下の陰中（彫りこみ）は、長さは6寸、広さは1寸、深さは4分とします。蓋と本体を合わせて、これを足もとの土台

に差しこみます。箱の本体にあたる部分の横にそろって穴をあけて中の空洞に通じさせます。その直径は4分です。その場所は、穴の中心から計って、上から3寸6分ほど下であり、趺（土台の部分）の表面から7寸2分の高さになります。粉を箱の蓋にあたる部分の表面に塗ります」。司馬公は、こう言っています。「府君（死んだ父や祖父）と夫人（正妻）は、あわせて一つの櫝（位牌を収納する箱）をつくります」。私が調べますに、虞主（虞祭に使う位牌）は桑を使用し、練祭（小祥）を執り行おうとするときになってから栗の位牌に変更します。今はこの段階から栗の位牌をつくり、そうして手軽で便利になるようにしています。場合によっては栗がないときには、堅い木を使用するだけにしています。櫝（位牌を収納する箱）は、黒漆を使用し、なおかつ一つの位牌を収容し、夫婦は祠堂に一緒にして入れます。すなわち、司馬氏の定めたようにしています]。

第１１章　遷柩、朝祖、奠、賻、陳器、祖奠

発引（柩を道に出すこと）の前日は、朝奠（朝のお供え）のついでに遷柩（柩を移動させること）を告げます。[饌（お供え物）を用意するのは、朝奠（朝のお供え）のようにします。祝（祝詞をあげる人）は、酒をつぎ、終わったら、北に柩がくるように向き、ひざまずいて、告げて「今以吉辰遷柩、敢告」と言います。ひれ伏して、立ちあがります。主人以下は、大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくし、二度おじぎします。思うに、昔は「啓殯之奠＝埋葬する前段階として、遺体を柩に入れたまま安置するにあたり、柩に防火用の泥を塗るのですが、その泥をはぎおとして、お供え物をする儀式」がありましたが、今は殯（遺体を柩に入れて安置すること）のときに柩に泥を塗らなくなっています。そうである以上は、その礼は施しようがありません。しかしながら、さらに節文（ほどよくきりもりして装飾すること）をすべてなくすことはできません。ですから、この礼を行うのです]。

柩をささげもち、先祖に対して別れの挨拶をします。[柩を移動させようとするとき、人夫が入ってきて、婦人は退いて避けます。喪主の主人と各家の主人たちは、杖で体を支えながら立って見守ります。祝（祝詞をあげる人）は、箱を使用して魂帛をささげもち、先行し、祠堂の前まで行きます。執事は、奠（お供え物）と倚卓（イスとテーブル）をささげもち、それに続きます。銘旌をささげもつ人は、それに続きます。人夫は、柩をもちあげて、それに続きます。主人以下は、大声をあげて泣きながら、ついていきます。男子は右についていき、婦人は左についていきます。重服（服喪の期間の長くなる人）が前となり、軽服（服喪の期間が短くなる人）が後になり、服喪の期間によって序列を決めます。従者は最後になります。服喪しないでよい親族は、男は男に右につき、

女は女の左につき、全員が主人や主婦の後に続きます。婦人は全員が頭巾をかぶり、祠堂の前まで行きます。執事は先に席（むしろ）をしき、人夫は柩をその上に運び、遺体の頭のほうを北にして出ます。婦人は頭巾をとります。祝師（祝詞をあげる人）と執事は、霊座と奠を柩の西に用意し、東に向きます。主人以下は位置につき、立って大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくし、止めます。以上の礼は、思うに、ふだん出かけようとするときに必ず目上の人に別れの挨拶をすることをかたどっているのでしょう]。

廳事（庭先）に移動し終えます。[執事は、帷（とばり）を庭先に用意します。人夫は入り、婦人は退いて避けます。祝（祝詞をあげる人）は、魂帛をささげもって柩を導き、右に一回点させます。主人以下の男女は、大声をあげて泣きながら、前のように着いて行きます。庭先まで行くと、執事は席（むしろ）をしき、人夫は柩を遺体の頭を南にして席の上に置いて出ます。祝（祝詞をあげる人）は、霊座と奠を柩の前に用意して、南に向きます。主人以下は、位置について座り、大声をあげて泣きます。座るためにしくものは、薦席（むしろ）を用います]。

そこで代わる代わる大声をあげて泣きます。[まだ納棺していない前のようにします。そうして発引（柩を道に出すこと）に至ります]。

親賓（親しい客人）は奠（お供え物）と賻（お香典）を差し出します。[初喪の作法のようにします]。

道具をならべます。[方相（悪霊を払う役割の人）は前にいます。狂夫（気の狂った男）のふりをできる人が方相の役割をします。冠や服は道士のようにし、戈（槍）を手に持ち、盾を高く持ち上げます。この役割の人は、亡くなった人の身分が四品以上なら、目が4つの面をかぶって方相となります。それ以下なら、目が2つの面をかぶって魍頭となります。方相（もしくは魍頭）の次は、明器、下帳、苞、筲、甕です。それらの道具は、卓子（テーブル）の上に載せ、2人でかつぎあげることになります。その次は銘旌です。これは土台からぬいて、手に持ちます。その次は霊車です。それを用いて魂帛と香火（お香の焚かれている香炉）をささげ持ちます。その次は大輦（柩を運搬するための道具）です。その傍らには翣（柩を装飾するためのもの）があります。以上は人に手に持たせます]。

魍頭（左）と方相（右）

日没の時くらいには、祖奠（祖先へのお供え物）を用意します。［饌（お供え物）は、朝奠（朝のお供え）のようにします。祝（祝詞をあげる人）は、酒をつぎ、終わったら、北に向き、ひざまずき、告げて「永遷之礼、霊辰不留、今奉柩車、式遵祖道」と言います。ひれ伏して、立ち上がります。その他は朝と夕方の奠（お供え）の作法のようにします。司馬公は「もし柩が他所から帰ってきて葬るときには、他所を旅立つにあたり、ただ朝奠（朝のお供え）だけを用意し、大声をあげて泣きながら旅立ちます。葬ることになったら、そこで以上の祖奠と以下の遣奠の礼を準備します」と言っています］。

第１２章　遣奠（出発のお供え）

その日の朝、柩を移動して大輦（柩を運搬するための道具）に載せます。［大輦をかつぐ人夫は、大輦を中庭に入れ、柱の上の横局をはずします。執事は、祖奠（祖先へのお供え）を片づけます。祝（祝詞をあげる人）は、北に向き、ひざまずき、告げて「今遷柩就輦、敢告」と言います。霊座を移動させて榜らに置き終わったら、婦人は退き避けます。人夫を呼んで柩を移動させて大輦に載せます。そこで横局をはめてクイで固定します。縄を用いて柩を結びつけ、しっかりと固定させます。男子は、柩についていき、大声をあげて泣いて降り、柩を載せるのを見守ります。婦人は、帷（とばり）の中で大声をあげて泣きます。載せ終わったら、祝帥（祝詞をあげる人）と執事は、霊座を柩の前に移動し、南に向きます］。そこで遣奠（出発のお供え）を用意します。［饌（お供え物）は、朝奠（朝のお供え）のようにします。脯（干し肉）があります。ただ婦人だけがいません。お供え終わったら、執事は脯（干し肉）を片づけ、苞の中に収納し、舁牀（２人でかつぐ台）の上に置き、奠（お供え）を片づけてしまいます］。祝（祝詞をあげる人）は、魂帛をささげ持って車（運搬用の道具）に登り、お香を焚きます。［別に箱を用いて、位牌を山盛りにし、魂帛の後に置きます。このときになって、婦人は頭巾をかぶって帷（とばり）から出て、階を降り、立って大声をあげて泣きます。守舎（留守番の人）は、大声をあげて泣き、別れの挨拶をし、悲しみの限りをつくし、二度おじぎして、帰ります。尊長（目上の人）はと言うと、おじぎしません］。

第１３章　発引（柩を道に出すこと）

柩が出発します。［方相が先導します。道具をならべたときの順番のようにします］。主人以下の男女は、大声をあげて泣きながら、歩いて付いて行きます。［祖先に挨拶するときの順番のようにします。門を出たときには、白い幕を用いて、柩を左右から覆い隠します］。尊長（目上の人）は、その次です。服喪の必要のない親族は、さらにその次です。賓客は、さらにその次です。［全員が車

馬（乗り物）に乗ります。親賓（親しい客人）は、先に墓所まで行って待ったり、町を出たところで大声をあげて、おじぎし、別れの挨拶をして帰ったりします]。親賓（親しい客人）は、町の外に幄（テント）を用意し、道の傍らに柩をちょっとだけ止めてもらって、奠（お供え）をします。[家にいるときの作法のようにします]。途中で悲しくなったときには、大声をあげて泣きます。[もし墓が遠いときには、宿泊するたびごとに霊座を柩の前に用意し、朝と夕方に大声をあげて泣き、奠（お供え）をします。食事のときには、食事をさしあげます。夜になったときには、主人や兄弟は全員が柩の傍らで休み、親戚が一緒になって柩を守ります]。

発引の図

第１４章　及墓、下棺、祠后土、題木主、成墳

まだ到着していないとき、執事は先に霊幄（霊座を置く場所）を用意します。[墓道の西にあって、南に向き、倚卓（イスとテーブル）があります]。

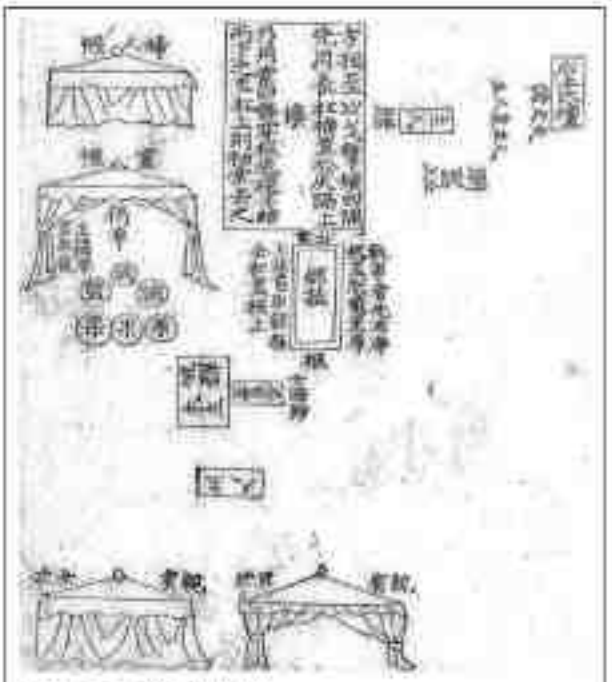
親賓（親しい客人）は、次（とばりを張ってつくった控所）にいます。[霊幄の前の十数歩のところにあり、男は東、女は西ですが、女は北に控え、霊幄と向かい合うかたちになり、全員が南に向きます]。

婦人は、幄（テント）にいます。[霊幄の後、墓穴の西にあります]。

方相が到着します。[戈を用いて墓穴の四隅を打ちます]。

明器などが到着します。[墓穴の東南にならべ、北が上となります]。

霊車が到着します。[祝（祝詞をあげる人）は、魂帛をささげもち、霊幄



墓地での祭祀の図

の定められた場所に設置し、位牌の箱も魂帛の後に置きます]。

奠（お供え）を用意し終わったら、退きます。[お供えは、酒、果物、干し肉、塩からです]。

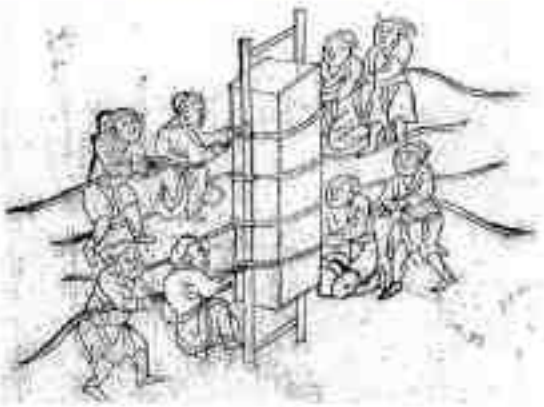
柩が到着します。[執事は、墓穴の南に先に席（むしろ）をしきます。柩が到着し、柩を降ろし、席（むしろ）の上に置き、頭のほうが北になるようにします。執事は、銘旌を取り、竿をぬき、銘旌を柩の上に置きます]。

主人や男女は、それぞれ位置につき、大声をあげて泣きます。[主人や男たちは墓穴の東に立ち、西に向きます。主婦や女たちは墓穴の西の幄（テント）の内側に立ち、東に向きます。全員が北を上とし、道を行くときの作法のようにします]。

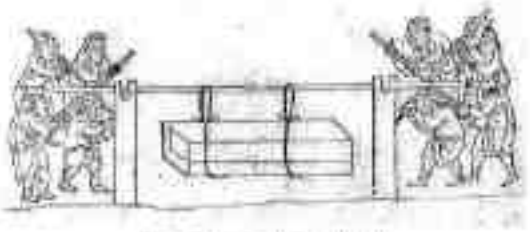
賓客（客人）は、おじぎし、別れの挨拶をして帰ります。[主人は、客人におじぎします。賓客は、それに答えるためにおじぎします]。

そこで棺を墓穴に降ろします。[先に木杠（木の柄）を灰隔の上に横たえ、そこで4本の縄を柩の底にある金属の輪にとおし、結びません。かくして柩を降ろし、柄の上まで着いたときには、縄をぬいて取り去り、別に細かい布もしくは生地のままの絹をたたみ、柩の底にまわします。かくして柩を降ろし、さらにぬき出したりせず、ただその余った部分を裁断して捨てるだけです。もし柩に金属の輪がないなら、そのときには縄を柩の底にまわし、両端を結ばないでたらします。柄の上に着いたら、そこで縄を取り去り、布を使用して前のよう

轆轤を使って降ろす図


縦にして降ろす図

縄を使って降ろす図


吊るして降ろす図

にします。おおよそ柩を降ろすのは、最も慎重に丁寧にすべきです。力を出し、まちがって傾き落としたり、動かし揺らしたりすることがあってはいけません。主人や兄弟は、大声をあげて泣くのをやめ、みずから立ち会って見守るようにします。降ろし終わったら、再び柩衣（棺にかける布）、銘旌を整え、きちんと平らになるようにさせます]。

主人は贈ります。[別れの挨拶として贈るのは、玄（黒い絹）は6つ、纁（赤い絹）は4つで、それぞれ長さが1丈8尺です。主人は、ささげもって柩の傍らに置き、二度おじぎし、額を地面につけます。位置についている人たちは、全員が大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくします。家が貧しく、場合によっては以上の数量をそろえられないときには、玄（黒い絹）と纁（赤い絹）はそれぞれ1つでも、さしつかえありません。その他の金玉（貴金属や宝石）、宝玩（宝物や装飾品）は、いずれも墓穴に入れてはいけません。（盗掘されるなどして）死者のわずらいとなるからです]。

灰隔の内蓋と外蓋をかぶせます。[先に灰隔の大小を計測し、薄板1枚を製作しておきます。側面は四方の壁にくっつけるようにします。ぴったりとすき間なく合わせたものを選び取ります。ここまで着たら、柩の上にかぶせ、さらに油灰（油と灰をまぜたもの）をまんべんなくぬりこみます。そうした後で、その上に瀝青（松やにと油をまぜた塗料）をそろそろと少しずつかけていき、それがすばやく乾燥するようにさせます。すなわち、板から下にしみこんでいかないようにするのです。どのくらいか見当をつけて厚さが3寸ばかりになったら、そこで外蓋をかぶせます]。

墓穴に灰を満たします。[三物（石灰、細かい砂、黄土）の均等に混ぜ合わせたものは下になり、炭の粉末は上になり、それぞれ墓穴の底と四方の厚さよりも2倍にし、酒をそそいで踏み固めていきます。柩の中を震わせるのが心配なので、棒で突き固めようとしないのです。ただ踏み固める方法を多用し、そうしてそれが固まるのを待つだけです]。

そこで土を満たして徐々に突き固めていきます。[土をおろして1尺ば

埋葬の図

かりになるごとに、そこで手に入れる力を軽くして突き固めていきます。柩のなかを震動させてはいけません]。

后土を墓の左に祀ります。[前述の作法のようにします。祝版は前と同じです。ただし「今為某官封諱窆茲幽宅、神其」と言います。あとは同じです]。

明器などを収蔵します。[土を満たし、半分まできたら、そこで明器、下帳、苞、筲、甕を便房（付属の部屋）に収蔵し、板を用いてその門を塞ぎます]。

誌石（墓誌銘を記した墓石）をおろします。[墓が平地にあるときには、墓穴のなかの南に近いところにまず瓦1枚をしき、その上に誌石を置きます。さらに瓦4枚を用いて誌石を囲んで、その上を覆います。もし墓が山のそばの険しい場所にあるときには、墓穴の南に数尺ほどの範囲で地面を掘り、深さは4から5尺にします。以上の原則に従って埋めます]。

また土を満たして、堅く突き固めます。[土をおろすのは、これまた1尺ばかりを基準とします。ただまんべんなく杵（突き固める道具）をつき、堅く突き固めます]。

位牌に書きつけます。[執事は、卓子（テーブル）を霊座の東南に用意し、西に向き、硯と筆と墨を置き、卓（テーブル）に対して盥盆（桶や皿）、帨巾（手ぬぐいやフキン）を置きます。これは前述のようにします]。主人は、その前に立ち、北に向きます。祝（祝詞をあげる人）は、手を盥（たらい）で洗い、位牌を出し、卓（テーブル）の上に置きます。字のうまい人に手を盥（たらい）で洗わせ、西に向かせて立たせ、まず陰中に書きつけさせます。父であるときには「宋故某官某公諱某字某第幾神主」と書かせ、表面に粉を塗って「皇考某官封諱府君神主」と書かせ、その下の左横に「孝子某奉祀」と書かせます。母であるときには「宋故某封某氏諱某字某第幾神主」と書かせ、表面に粉を塗って「皇妣某封某氏神主」と書かせ、横にも父と同じように書かせます。官と封のないときには、生きているときの呼び名を号とします。書きつけ終わったら、祝（祝詞をあげる人）は、ささげ持って霊座に置いて、魂帛を箱の中に収蔵し、そうしてその後に置きます。お香を焚き、酒をくみ、板（祝詞を書いた板）を手にとり、主人の右に出て、ひざまずいて板を読みます。子と言うのは前と同じですが、ただ「孤子某敢昭告於皇考某官封諱府君、形帰窀穸、神返室堂、神主既成、伏惟尊霊、舎旧従新、是凭是依」と言います。終わったら、これを懐に入れ、起き上がり、もとの位置に戻ります。主人は、二度おじぎし、大声をあげて泣き、悲しみの限りをつくし、止めます。母の葬式では、「哀子」と称します。あとは以上を手本とします。およそ封や諱をもっているときには、すべて称します。あとはすべて以上を手本とします]。

祝（祝詞をあげる人）は、神主（位牌）をささげ持ち、車に乗ります。[魂帛の入った箱は、その後にあります]。

ことです。その降服はと言うと、庶子でその父の後継者となっている人は、その母のために緦麻を着用します。しかし、その母の父母、兄弟、姉妹のために服喪するときには、喪に服しません。その義服はと言うと、族曾祖母のために緦麻を着用します。夫の兄弟の曾孫のために緦麻を着用します。族祖母のために緦麻を着用します。夫の従兄弟の孫のために緦麻を着用します。族母のために緦麻を着用します。夫の従祖兄弟の子のために緦麻を着用します。庶孫の婦人のために緦麻を着用します。士は庶母のために緦麻を着用します。庶母とは、父の側室のうちで子のいる人のことです。乳母のために緦麻を着用します。婿のために緦麻を着用します。妻の父母のために緦麻を着用します。妻が死んで別の妻を娶っているときも同じです。このとき妻の実母が、たとえ嫁にいって出ていっているのであっても、やはり喪に服します。夫の曾祖、高祖のために緦麻を着用します。夫の従祖祖父、従祖祖母のために緦麻を着用します。兄弟の孫の婦人のために緦麻を着用します。夫の兄弟の孫の婦人のために緦麻を着用します。夫の従祖父母（祖父の兄弟姉妹）のために緦麻を着用します。従父兄弟の子の婦人のために緦麻を着用します。夫の従兄弟の子の婦人のために緦麻を着用します。夫の従夫兄弟の妻のために緦麻を着用します。夫の従父姉妹のために緦麻を着用します。嫁入りしている人は降服をしません。夫の外祖父母のために緦麻を着用します。夫の従母（母の姉妹）と舅（母の兄弟）のために緦麻を着用します。外孫の婦人のために緦麻を着用します。娘は姉妹の子の婦人のために緦麻を着用します。甥の婦人のために緦麻を着用します］。

およそ殤服（若死にした人のための服喪）をするときは、順序を１等級だけ降ろします。［およそ１９歳から１６歳までが長殤となり、１５歳から１２歳までが中殤となり、１１歳から８歳までが下殤となります。服喪をする期間は、長殤が降服の大功の９か月、中殤が７か月、下殤が小功の５か月で、大功よりも下の服喪をするときは、順序を１等級だけ降ろします。８歳に満たないのは、無服の殤（父母が服喪しないこと）となり、大声をあげて泣くのは日から月に変更します。生まれて３か月に満たないときには、大声をあげて泣きません。男子が妻を娶っているときや、女子が婚約しているときは、すべて殤（若死にした人のための服喪）をしません］。およそ男で他家の後継者となった人や、女で嫁入りした人は、その私親（身内）のために服喪するにあたり、すべて１等級だけ降ろします。私親（身内）がその男女のために服喪するときもまた同様です。［女で嫁入りした人は降服をしますが、その期間が終わらないうちに離婚されたときには、その本服（実家の親の服喪）に服します。正しく服喪が終わったときには、二度と喪に服しません。およそ婦人が夫の一族のために喪に服することになり、服喪になって離婚したときには、服喪を終わりとします。およそ側室がその私親（身内）のために服喪するときには、一般人のようにしま